

哲學研究

第百廿二號

第十一卷
第五冊

物的及心的現象と感覺

高 瀨 安 貞

内 容

- 問題 I プレンタノ感覺とフツサールの感覺 I プレンタノ物的及心的現象 2 感覺と知覺に於るプレントノミフツサ
 Iルとの相異 3 内部及外部知覺に關するプレントノミフツサールの相異 II 意識と外在 4 意識體驗の非獨立性 5
 意識の「自我保持性」と外在の「自我相異性」——リッケ III 外部知覺の對象と作用、感覺 6 外部知覺の分析 7 素材と對象
 この關係——感覺 結論

問 題

我々の經驗する世界は「現象の世界」である。「現象」の世界は物的現象と心的現象と

物的及心的現象と感覺

の二大種類に分たれる。我々が知覺する山川草木の所謂物體界は前者に屬し、知覺判斷、感情、意志等が後者に屬することは明かである。然るにこの兩現象界の區別に際して甚だ曖昧なる領域がある。それは感覺或は感性知覺の内容である。一般の心理學では色、音、溫冷等の感覺内容は我々の意識の要素として現れ、且實在界に其儘存在しないの故を以て直ちに體驗内容、心的現象であると主張する。然るに日常我々は之等を外物に歸して疑はない。假令論理的基礎付はないにしても自己の意識より獨立に存在する所の外界の性質であることを信ずる。素樸であるにせよ、幾千年の間、人間が「色、音等は外界に存在する」と云ふ信念を懷き來つたのは何を意味するであらうか。感覺が外的事實を保證し得ないからと云つて直ちにそれを體驗事實心的現象と云ひ得られるであらうか。物的及心的の區別、青、赤、音、臭等の所謂感覺は物的、心的いづれに屬し、又如何に關係するか。之等の問題を純心理學的に究明せんとするのがこの小論文の思惟動機であり、又意圖である。

(この小論文は上述の問題に關する諸學者の論究を單に思隨し、纏めたに過ぎない)

而も尙不滿なる又明瞭ならざる點も多く、又圖らざる誤解も多いであらふ。その補正や更に充全なる考察は後に稿を改めてその完全を期したい、庶幾くば先醒諸氏の御教示を切に御願ひする。

一 ブレンタノの感覺とフツサールの感覺

一

ブレンタノによれば、我々の經驗する現象の世界は二大種類に分たれる。即、物的及心的現象のそれである。彼は心的現象を表象として、並びに表象がその基礎となる、如き現象として規定した。勿論、彼は種々の「意識の仕方」を表象それ自身から明確に區別し、表象が意識に「對する基礎」(Grundlage)と云ふこと、表象「から由來」(ableiten aus)すると云ふことは全然異なるものと考へて居る故にヘルバルトの觀念論からは明かに區別せられる。ブレンタノに於て心的現象の最も重要な積極的標識(Markierung)は疑もなく「一對象への關係」である。「或ものを對象としてそれに關係すること」である。彼は心的現象が志向的に一對象をその中に含む限り、それを意識と呼んだ。併し注意すべきは彼によれば「對象の内在」(「對象的内在性」) Gegenständliche Inexistenz “とはアリストテレスの傳統によつて考へられる如き意識内に或る仕方で内住する (innewohnen) 「物の存在法」, Seinsweise des Dinges “ではない。即精神の中に或仕方で内住する對象があつて、それと表象する者との或關係を志向的關係と云ふのではない。心的關係

は決して「共存關係」Koexistenz relation ではない。「關係」と云ふ言葉を普通の意味に解すればそれは必ず二名辭の存在を豫想する。然るに謂ふ所の心的關係に於ては只一つの名辭のみしか存在しないことをその特質とする關係する所のものは二者である。而して一方より他方への關係を翻すことが出来る。物的現象の關係はこれである。併し或ものを表象し意識するものは唯一者である。一は他を志向的に、意味的に含むのみであつてこの關係は翻し得ない。故に意識は「關係に相似的なるもの」Relativähnliches 或は「關係的なるもの」Relativliches である。所謂「關係なき所有」Beziehungslose haben である。但し、共存關係も心的關係も共に二名辭なしには考へられない。而してその場合一名辭は *in toto* 直接に、他は *in obliquo* 間接に考へられる。そこに兩者の相違點がある。例へば「花を愛するもの」と云ふ所謂心的關係を表象するならば「花を愛する者」は直接に「花」は間接に表象せられる。心的關係が共存關係と異なる所は或ものが心的關係に立てばその對象は現實的に存在しなくとも、心的に對象に關係する所のものは必然的に存在しなければならぬ點である。(Klassifikation: Anhang)

心的現象即意識は上述の如く對象への關係そのものではない。或對象に關係すると云ふことは心的現象の特質であるけれ共、心的現象と云ふ概念と對象への關係

と云ふ概念とは區別せられなければならない。何となれば凡ての心的現象は一次的に對象に關係するのみならず二次的に自分自らを對象とする。かくしてのみ心的現象は志向としてのその意味を持つことが出来る。故にブレンタノによれば如何なる心的現象も必ず二つの對象を含む。而して一は志向的イニテンショナルに、他は現實的ライヴリヒに、志向的對象即一次的對象とは表象作用に於て把捉せられる色、音等の物的現象の世界又は超越的に把捉せられる心的現象である。これは心的現象に實在的に屬することはい出来ない。反之志向的對象に關係する、即志向する心的現象は同時に自らが自らの對象となる。ゆゑにかゝる二次的對象は一次的對象に對して現實的でないならぬ。この場合意識するものと意識されるものとは唯一現實の心的現象である。

如斯ブレンタノに於ては我々が意識する所のものゝ存在は意識の概念に全然無關係である。意識の對象は意識自身に屬する實在的(reell)なる要素ではない。意識とその對象或は内容とは截然と區別せられる。故に「表象」と云つてもブレンタノは決して表象せられたものとは解せずして、對象を表象する所の作用と解したのである。(音の Hören 色の sehen 等)の區別は「作用心理學」aktpsychologie の基礎である。又

彼は感覺と想像とを一が物的現象によつて成立し、他が聯想の法則に従ふ所の心的現象によつて生起すると云ふ事實によつて區別しやうとする主張に反對する。即物的現象が屢々想像の中に現れ得るからと云つて、決して物的現象と考へてはならないと注意した最初の人はブレンタノである。

二

ブレンタノの感覺に於る物的と心的との關係も同様である。彼に於ては感覺は狹義の「外部知覺」(Äußere Wahrnehmung)と同意義である。即外部知覺とは感性的に與へられたるもの、凡ての視、聽或物の エントツチ 感じの中に現前する所のもの、盲目的信念 Blinder Glaube である。感性知覺は或もの、單なる表象ではなく、本能的に眞と考へるもの、Für-wahr-nehmen であり、音や色の單なる表象には存在しない所のそれ等の Erwählbar hinnehmen である。故に「感覺」は我々が感覺して表象する所のもの、盲目的信念、即信念の作用(判斷作用)である。

例へば一定の緑を感覺するならば「私はこの緑を對象に持つ」のである。而もそれを眞であると信ずるのである。この場合、緑は全心的現象の一部分ではない。その

實在^レなる成素ではない。ブレンタノは明かに感覺を感覺する作用即心的現象と考へ、感覺の對象、感性的、性質的又は空間的者即物的現象から區別して居る。

この點に於てフツサールの考方と大いなる相違がある。フツサールは特殊の感覺作用を認めなかつた。彼によれば感覺は體驗ではあるが、併し志向的體驗或は心的作用ではない。こゝにブレンタノと全く異つた體驗及作用の概念が生ずる。即フツサールは一の作用に於て、その志向的内容即内在的對象の他に、尙一つ、それと全く異つた内容を區別する。『それは作用を實在^レ的に組立てゝ居る。必然的なる支持點として志向性を可能ならしめるものである。併しそれ自身は志向せられない。

それは作用が表象する對象ではない。我々は色の感覺を視るのではなく、色あるものを視るのである。私は音の感覺を聴くのではなく、歌女の唄ふ歌曲を聴くのである。(L. u. II. s. 374)それは現象^{現象する物} [Erscheinende Ding]ではなく、物の現象 [Ding Erschei-nung]である。意識の複合的關係に屬するものとして、我々は現象を體驗する。「體驗」とは reel な部分として凡ての現象學的意識の流れを構成して居る所の多様な部分 reel なる複合内容の凡てである。この現象學的體驗概念はそれ故に「意識統一一般に現在^{現在する}する凡てのものを含む。而して現在するとは現前^{現前する}することであつて知覺

し、認識し、表象するや否やには關はらない。フツサールによればこの現前する「體驗」内容が即「感覺」及其複合體である。即「感覺」とは我々の意識統一に於て事實的にかくかくと規定せられた特殊の種類の種類「體驗」(L. u. H. 23, 235)である。故に「體驗」は、必ずしも、志向的ではない。感覺自身は作用ではないけれども其作用はそれを以て構成せられる。從而「志向的體驗」即「作用」は記述的には「定礎せられた」(Fundierte)體驗の一種類のみを意味する。「志向的」と云ふ附加語は記述的に定礎せられた體驗の種類に共通なる本質を意味する。即表象知覺或は他の同様なる仕方により對象的に關係する所の「志向性」と云ふ特性を云ひ表はすのである。故に現象論的記述的に最も廣い體驗又は意識の領域の中には志向的體驗即作用とそれ自身作用ではないが、作用の柱石たり得る所の「非志向的、非作用的體驗」即「意識内容」とが區別せられる。

如斯フツサールは「ブレインタ」が感覺の作用から區別した所の感性的性質的なるもの及空間的なるものそれ自身を「感覺」と稱し、それを意識統一「體驗」に「属」に屬する部分内容であると考へた。然るに「ブレインタ」の思想を徹底すればかゝる感性的なるものはそれ自身「感覺」の對象であつて心的現象即意識作用には屬しないものであると考へねばならないのであらふ。これは兩者間の知覺に對する見界に根本的な

相異があるからである。

即ツツサル L. F. H. s. 382 で次の如く考へて居る。「一の箱を見る。」場合、普通箱が如何に向けられ、如何に廻はされても、常にこの同じ箱を知覺する、或は同じ意識内容を持つと云はれる。併し體驗せられた内容に就てより正確に、より適當に云ふならば、我々はその箱の各轉向毎に新しい意識内容を持つ、從而種々相異した内容が體驗せられて、而も尙同一の對象が知覺せられる。從而一般に云へば體驗せられた内容は知覺せられた對象と區別せられなければならない。更に現在する感覺、從而色、形等の體驗せられた要素は、それに對應し、それを解釋する作用内に於る(色あり、形ある)對象の現象的性質から區別せられなければならない。(Farb-empfindung と Körperliche Färbung, Gestalt-empfindung。 Körperliche Gestalt) 即如上述異つた内容の體驗から同一の對象を知覺することが出来る。反對にまた同一の意識内容に基いて異つた對象を知覺することが出来る。從而對象は感覺の如く意識内に現前しない。寧ろ、志向的に、意味的にのみ單に顯現せられ超越的に思念せられ捕捉せられる。而して捕捉それ自身は決して新しい感覺の流れへは還元せられない。ツツサルは感覺をかゝる捕捉によつて即意識の仕方によつて體驗することをその對象の知覺と稱する。

故にフツサールは知覺に於て意識内容(感覺)と志向的對象とを區別する。

フツサールは如斯感覺内容をそれが相異するにも拘らず同じ意味で「捕捉し、私に對する對象の存在」と造出する所の「解釋する一體験性質を統覺」とも稱した。統覺とは感覺の粗笨なる存在に對して體驗自身の中に成立する所の過剩である。それは感覺を云はゞ精神化する所の作用の性質である。故にフツサールによれば感性的なるもの即感覺とそれを捕捉し統覺する作用とを一の意識統一として體驗すると考へる。即統覺の本質は種々の體驗された感性的なるもの即感覺を對象的に知覺することである。

併しブレンタノはフツサールの所謂種々の感覺内容の對象的捕捉例へば「箱の知覺」を本來の意味の知覺とは考へない。ブレンタノに於ては「知覺」と「直觀」Anschauungとは同意義である。従つて感性的なるもの即フツサールの所謂感覺を外的に知覺することを Für-wahr-nehmen それがブレンタノに於て「外的直觀」であり「感覺」と同義である。「箱の知覺」の如きは直觀概念的表象判斷等種々なる精神活動の聯合的融合複體 Associative Verschmerzungs Komplex である。我々は「直觀」或は「知覺」の對象として盲目的に信するが併し存在はしない所の感性的なるものを持つのである。かゝる感性的

なるものから「擴り」又は「形」と云ふ如き概念は直接に抽象し得られるけれども併し「箱」と云ふ如き概念は如何なる直觀からも抽象し得ない。それは「視る」ことも「味ひ」「嗅ぎ」「聽く」ことも出来ない。同様にそれは「觸れる」ことの出来ない「目的規定」をも含む。それは抽象的概念綜合である。超越的外物は布伦タノの外部知覺の對象ではない。フーゴ・ベルグマンの云ふ如く眞の知覺は常に單純なる措定 *theische* 判斷、直觀的、直截的作用でなければならぬ。

三

布伦タノは内部及外部知覺を(一)判明性(二)異つた對象とによつて區別して居る。フッサールは之に反對して『内部及外部知覺は一般的に全然同じ認識論的性質を持つ。即判明(充全)及不判明(不充全)知覺と内部及外部知覺とは一致せずして交錯する』と主張する。(L. u. II. 2 s. 231)

若し「解釋」を知覺と同一と解すれば内部知覺に於ても不充全(不確實)知覺は可能である。…「解釋に於る凡ての齟齬」は誤謬の泉である〔Bergmann=Evidenz s. 59〕「怒りが頸を緊める」「悲みが胸を張りさける」等の定位は詩的比喻や感情に伴ふ物的現象を

云爲しない限り明かに誤りである。かゝる「解釋」を内部知覺であると云ひ得ない。ブレンタノによれば「外部知覺は判明でない。否寧ろ常に詐瞞的 *trügerisch* である」(Bych. s. 128, 56) 色、音等の感性的性質的者一般は物理學者によつて實在の世界から除去せられた。それにも拘らずその感性的性質的なるものを盲目的に信ずる限り、外部知覺は例外なく「誤覺」*Falschnehmung* である。それは「木や家の存在に關して屢々我々を瞞き、又瞞き得るの故を以て詐瞞的であり迷誤的であると云ふのではない。唯我々が視野の色ある形を直觀し、それを眞であると考へて論理的に正當付けられない信念に陥るの故を以て詐瞞的であると考へる。

然るにフツサールは「家の存在」に關して誤り得ても、體驗せられた「感性的内容の存在」に關しては誤り得ないと主張する。(L. u. II. 2. s. 237—8) 即前述の如くフツサールの所謂感覺は作用の特徴たる對象ゲイグンズデンドリック的なるものへの關係を缺いて居る。それは作用ではないが作用はそれによつて構成せられて居る。我々が感覺を通じて家や木を思念するならば感覺それ自身は特殊の對象的なるものにはならない。我々は知覺の中で感性的内容を知覺するのではない。我々は知覺の中で感性的内容を知覺するのである。寧ろ反省によつて此内容を注意し、それが意味する志向的對象へ

の解釋から抽象し、單にそれが、ある如く、に現前するものとして受容れるならば我々は初めてそれを知覺する。併し、それは外的對象を知覺するのではない。この新しい知覺は内部知覺の或ものと全然同一の確實性と判明性を要求する。それがあつて如く、にあり、且思念せられる所のもの、それを疑ふのは明かに不合理である。三、心的、と全く同様に、物的、内容の判明なる知覺があると主張する。

併し、如斯原本的には對象的でない所の意識内容を單に解釋することのみによつて、どうして超越的對象性がかゝる意識内容に與へられうるのであるか。また、我々がかゝる解釋を中止することによつて、その對象的關係のない非作用 *Nichtakt* の中に住息し得られると云ふならば、それによつて所謂新しい知覺としての判明なる對象意識が如何にしてこの對象性を持たなかつた筈の非作用に對して生じ得るのであらうか。フツサール自身何等言表する所がない。

更に又、その所謂非作用を體驗の對象としてではなく、體驗として特徴付けるものは何か。もし意識體驗の中に作用と非作用があつてその非作用はそれ自身對象的なるものではなく、而も尙それは凡ての場合對象の志向的意識を構成しなければならぬと考へるならば、かゝる心的現象内の二重性は、どうしても精神内に存在する

内在的對象の假定に陥らなければならぬ。何となれば對象を原本的に持たない感覺を通じて我々が作用の中に現實的なる家や木を思念し、かくして初めて感覺が作用の中に入り得るとすれば、この非作用は意識の作用と對象との中間物として想定せられる所の内在的對象と非常に相似て來るであらふ。唯内在的對象と現實的對象との間には充全と一義的なる對應を認めるに對し、感覺とそれを通じて我々が知覺する對象との間にはかゝるものを認めず同一の非作用も異つた對象の知覺を可能ならしめると考へるだけの相異である。我々は對象の心的内住論の誤謬に陥らない爲にはフッサールの非作用それ自身を對象的なるものと考へねばならぬであらふ。

或は云ふかも知れない。『外部知覺はその感性的内容と對象とを關係させて規定する時(緑の紙)に初めて誤謬に陥る。併し視られた色は緑である』と單に判斷するならばそれは誤り得ない。この知覺は事實的に與へられた感性的内容の知覺を超えて居ない』か。

併しこれには内部知覺の判斷と外部知覺の判斷との間の重要な混同がある。上述の判斷で正しいのは内部知覺の判斷であつて、決して性質的、空間的なるものを

承認するのではない。感覺に對して與へられた判明性を感覺せられた性質の存在の保證であると考へてはならない。(Bergmann Ein. s. 65)

布伦タノの語法を以てすれば外部知覺即感覺の對象(縁)に就てそれが我々に現象するやうに現實的にも存在すると云ふ權利はない。外部知覺の感性的性質的なものゝ決して判明でない所の盲目的なる信念である。判明であるのはこの場合我々がこの信する性質を對象に持つことである。併し判明なる二次的意識(内部知覺)は一次的意識(外部的知覺)の對象を唯 *Modo Obliquo* 即間接にのみ對象に持ち得るのである。私が色を對象に持つ人を正當に認知するからと云つて、それによつて色をも同様に認知するといふのは正當でない。それと全く同様に私が「色を視るもの」としてこの私自身を判明に認知するからと云つて直ちにそれによつて *Modo Obliquo* に認知せられた色を判明であると云ふのは正當でない。只フツサールの云ふ如く、『それがある様に内在的にあり、且思念せられる所のものを疑ふのは不合理』ではなく、寧ろそれを内在知に持つ、即表象する所の或ものがある、と云ふことを疑ふのが不合理』であると言ひ換へられねばならない。

布伦タノに於ては感覺は他の凡ての意識と同様志向的體驗である。私がある

ものを視聽き、觸るならば私は或ものを感性的に對象として持つのである。而して想像内容を表象するならば或ものを非感性的に對象とするのである。「或感性的なるものを對象に持つ」と云ふことはフツサールの如く或感性的なるものを部分として持つことではない。「意識の對象を意識の部分」と同意義であると考へるものは認識論的誤謬に陥らねばならない。神ジュピターを表象する場合神ジュピターは意識體驗の real な一部分であり得ないと全く同じく、或綠の直觀的擴りを表象する場合、この直觀的感性的所與は體驗の real なる成素には屬しない。凡ての意識は或ものゝ意識である。而して凡ての感覺も意識である。意識の本資を明かにせんとする者はブレンタノのこの根本的なる心理學的認識の立場に還らなければならぬ。

二 意識 (Bewusstsein) の外在 (Aussensein)

フツサールに密接に結付いてハインリヒホフマン (H. Hofmann=Unter Suchungen über Empfindungsbegriff) は視覺的感性的知覺を精細に分析し、アウグスト・メツサーも同様にして感覺概念を規定して居るが共に「感覺を感性的内容即所謂物現象」Dingerscheinung 内の非獨立的なる要素として抽象と注意とによつて相對的に分離せられ得るもの

と考へ、而もこの「物現象」従つて感覺をその感性的性質的空間性にも拘らず心的であるかと考へて居る。(Messer Psychologie s. 145)

如斯フツサルや其他作用心理學の立場に立つ多くの著明なる學者達がブレンタノの物的及心的現象の區別に共に原理的には一致しながら、この區別を感覺の領域に徹底し得ず非常な曖昧を來したのは何によるか。これは一方勢力ある自然科学的心理學の見界の不明瞭なることによるであらうが、一方又、ブレンタノの側に於ても、かの志向性論及之に關聯する内部知覺論そのものが未だ物的及心的兩現象の區分原理としてまた規準として、充分なる根本的明瞭性を缺く様にも思はれる。然らばその他兩現象を區別する規準はないであらうか。我々は更に進んで意識とは如何なるものかを他の方面から考へて見る必要がある。

四

一般に意識形象或は意識體驗と呼ばれる者は獨立的なるものであるか。又は非獨立的なるものであるか。普通心理學では獨立的と考へられる。勿論「體驗」を「意識状態」と解して、意識體驗の中に、事實共存し、密に織組まれ、時間的連續的に結付く部分

過程とも考へられる。併し、かゝる部分過程は分析的抽象の所産であるにしても、またその場合他の部分過程との定礎ファンダメンタル關係を考慮せなければならぬにしても、兎に角一つの 自己なる具體的意識の流れの中からそれを構成して居る同様に具體的な部分過程を相互に對して非獨立的であると考へることなく分離し得られ相互に獨立的であると考へることは原理上可能である。併し、この具體的な體驗は本當の意味に於て具體的獨立であらうか。獨立的(具體的)對象とはそれ自身獨立に存在し得ないことをその本質とし、非獨立的對象とはそれ自身獨立に存在し得ないことをその本質とする。我々の凡ての心的體驗を相互に比較すればそれ等は凡て「主體」に屬すると云ふ共通點を持つ。視聽、判斷、愛憎等は視る人、判斷する人、愛する人なしに存在すると考へるのは無意味である。凡ての心的體驗は或ものに結付き、その或ものが心的體驗をして一の完全なる獨立的として表象せられ得る全體たらしめる。この或ものを體驗する「主體」と名付ける。只心的體驗は獨立には存在しない。否、獨立には存在しないことがその本質である。

五

體驗する「或者」のない如何なる體驗もない。この「或者」を「自我」Ichと云ふ。主體と云ひ自我と云つても單に體驗する者以上の何者をも意味しない。それは非獨立的なる心的體驗一般をして有意味に存在する或ものたらしめる所のそれと同様に非獨立的なる要素を意味するに過ぎない。勿論この「自我」の非獨立性は決して變化する體驗に對して常恒であることには矛盾しない。「大さ」は常恒でありながら「形」は多様に變化し得る反對に亦「形」が常恒であり乍ら「大さ」は多様に變化しうる。而も兩者は互に非獨立的要素である。

一般に「自我表象」は記述的に「指示され得る」Aufzählbar 様に存在して居ないと云ふのは正しいであらう。併し「自我表象」は決して「自我」ではない。それにも拘らず「自我」は常に或意味で指示せられ得る。その或意味とは一定の「形」に「大さ」が一定の「色」に「光度」が常に指示せられ得ると全く同様の意味である。我々は單に色にのみ、又單に「形」にのみ向ふこと出来る。而してその場合「大さ」「光度」は意識には現はれない。従而我々はそれ等に就て一定の報告をなし得ない。併し「大さ」なき「形」「光度」なき「色」があり得るであらうか。同様に「正方形」を見る場合角の相等性は正方形の本質に屬するが故に見られた正方形が等しい角を持つて居たと云はれず、またこの性質を持つ

ものとして認知もせられず、注意もせられない。全く同様に我々は體驗に常に本質的に、結付く「自我」を注意しない。それにも拘らず「自我」は具體的なる體驗の全體に存在すると明かに云ふことが出来るであらう。

反之、「赤い球」の如き物的なるものは獨立なる具體的全體即獨立の對象である。一赤球を知覺或は單に表象すると云ふ體驗を考へて見る場合、明かに我々はその赤球とそれが與へられる體驗者とを表象する。併し、私が球のみを表象し様と思へば體驗者の如何なる痕跡もなき單なる直截なる球のみを何等の矛盾もなく表象し得る。それは他の物體や個々の「自我」即「體驗主體」と同列の獨立者である。

然るに「悲しみ」の體驗を考へる場合、勿論「悲しみ」のみをその體驗者から分離して表象し得る。併し、かゝる分離状態に於てはこの「悲しみ」は必然的に一の「Torsio」である。その具體的なる形象ゲルデを持たんとすれば私は必然的にそれにその體驗者を附加せねばならない。勿論體驗者の經驗的性質全體を附加するを要しないにしても、分離せられた悲しみの體驗を具體的全體たらしめる「自我要素」アイモメントとしての「自我」を必ず附加せなければならぬ。恰も色を單に分離せられた非獨立的なる標識として、はなく具體的なる形象を完全に直觀しやうとすれば必ず色に空間的形態擴りを附加

しなければならぬ。併しその場合、「擴り」以外の經驗的物理的性質、重量、彈性等は附加するを要しないのと同様である。

こゝに我々はパウル・リンケが主張する物的及心的意識ベウストザインと外在アウゼンザインとの區別規準を承認することが出来る。「球」は完全なる具體性に於て現前する爲には決してそれを體驗する「自我」を要しない所の形象である。然るに「悲しみ」は本質的に「自我」に屬するものである。一の球を表象するならば私が向ふ所のものは直截に一の球である。反之同様に「悲しみ」を表象しやうとするならば私は必ず體驗者を表象しなければならぬ。悲しみの體驗或悲しみの状態にある體驗者を表象しなければならぬ。「悲しみ」は「自我」附着的「Ich haft」であり、「自我」保持的「Ich haltig」である。「球」は「自我」相異的「Ich fremd」である。(Linke=Grundr. I. Wahr. s. 114) 「意識」ベウストザイン形象に對し「外在」アウゼンザイン形象を對立せしめることが出来る。それは「自我」相異的なる對象である。之を「自我」保持的に對し「空間」ライムヘル保持的ゲイヒと云ひ得る。而も尙、「空間」保持性なる標識を斷念することは出来ない。音や臭の場合の如く「自我」相異的なる形象に拘らず空間性を認めないものも、單に「自我」相異性を以て充分満足することが出来る。又我々はブレンタノを感覺内容(綠、音等)を感覺作用から峻別した考へ方にも一致することが出来る。

「外在」の規定や分類に際しては決して意識事實の存立を前提する様な立場を必要としない。「外在」は「意識」に對して獨立である。「外在」の本質はそれが直接に「自我」相異的として意識事實の世界に如何なる仕方にも於ても屬しない或物として顯現するに在る。從而明白なる意識事實を外在に對する規準とせんとする凡ての規定や分類原理は本來無意味である。

この逆は妥當しない。意識事實は外在の規定に定位する。その區別に對しては外在の扶助が不可缺である。これは志向性なる本質よりして直接に必然的である。併し外在の對象は決して如何なる心理的關係によつても限定せられない。同一の三角形を單に手で觸れたものと、手袋の手で觸れたものとに區別するのが笑ふべき如く、現實的に同一なる三角形を知覺せられたものと回想せられたものとに分類するのは笑ふべきである。更に風景は藝術家がそれを描くか否か、或は如何に描くかには無關係である。併し繪畫に對しては勿論その對象が風景であるか否か、或は如何なる性質をそれが持つかは絶対に重要である。對象に志向する意識は繪畫と同様である。從而直接に「自我」保持性を示すといふことは外在の本質には屬しない。反之、自我保持者に對しては外在に向けられるといふこと外界に結付くと云ふこと

はその本質である。外在は常に必然的に自我相異的である。併し意識は決して必然的に外在相異的であり得ない。

三 外部知覺の對象と作用、感覺

六

我々の最初の問題は外部知覺に於る物的及心的の關係である。故にこゝに直ちに外部知覺の分析に移る。

外部知覺とはリンクの所謂外在を直觀する作用である。この場合勿論外在の現實或は非現實性は外部知覺の性質に何の關係もない。何となれば知覺の對象はその現實非現實性のいづれに拘らず、それが自我相異的として與へられる限り、絶對的に外在に屬し、決して體驗の流れには屬しない。

例へばこの青い面は一定の時間に、一定の作用によつて知覺せられる。而してこの對象が同一である間、體驗の流れの同種の作用の絶えざる連続である。即青い面を把握するその作用は一全體作用である。併しその面に變化が生ずれば體驗の連

續もまた同種でもあり得ない。即對象が同一であれば作用體験も亦同一であり、對象が變化すれば體験の側も亦變化する。即一般に對象の意識があればそれはその對象によつて相違しなければならぬ。換言すれば凡ての志向的對象はそれに對する特殊の作用と對應しなければならぬ。只作用は決して單純なる形式的把捉を意味しない。それは單に火箸の如きものではなく、對象の媒介者として内容の側を持たねばならない。知覺作用を單なる「火箸の性質」の如く考へ作用の側に於ては單なる知覺一般以外に何等の區別をも認めないのは正當でない。一は色、他は音の知覺的なる把捉である以外に、特に視作用聽作用等の間の區別が認め得られないであらふか。我々は特定の色を知覺すると云ふ場合我々は常に特殊の意識状態を持つであらふ。それは特定のかくかくの視作用であつて決して單に視られた色でも、また簡單なる覺的把捉でもない。我々は色を視、音を聽くのであつて決して色を聽き音を視ることは出来ない。のみならず私の意識内の現象は外的對象亦を把捉する場合と音を把捉する場合と必然的に異なるのである。而して私は意識状態のこの變化を直接にその對象によつて影響せられたものとして體験する。勿論この外的對象とは物理的刺戟としての現實的對象や生理的刺戟としての感官を指すのでは

ない。それは「現實的」といふ賓辭に關係のない所の直接所與の外在的對象である。それは私に與へられ、私が之れを把握するのである。把握と云つてもこの場合、それ自身獨立なる自我の活動ではない。對象に對應する單なる體驗の現象である。

對象は「自我相異的」として、青は青として獨立なる、即我々の知覺作用に獨立なる外在として直接に顯現する。從而それはそれ自身知覺せられた對象ではない。對象は體驗する自我の中に對應する自己を浸透せしめて初めて知覺せられ、對象となることが出来る。只意識體驗の流れの中には與へられた對象の最小個別性にまで對應する過程、從而意識の凡ての特異、凡ての變化はその對象の一特異、一變化に對應せなければならぬ。この對應或は「接合」[Köpfung]をリンクは「内容」なる多義語を避けて知覺一般に表象の「素材」[Stoff]と云つて居る。この「作用素材」に對して「作用形式」が區別せられねばならない。即一作用に於る種々なる對象への志向的關係は前者であり同一對象の意識への現れ方、即知覺せられるか或は單に表象せられるかの相異は後者である。從而「作用全體」は「素材形式」及對象が私と同様他の主體にも把握せられ得ること、即「自我」の三要素に區別し得られる。故に凡ての作用は三次之に變化するものと考へられるであらふ。

七

リンクは作用の素材と對象との關係を「鏡」で以て言ひ表はして居る。(Grundlage 3. W. S. 150) 併しこの場合「鏡像」と「原型」との關係を云ふのではなく寧ろ反對に原型とは全然無關係である。それは唯鏡の中の對象と鏡面との關係である。この對象はそれが直接與へられる儘に考ふれば鏡面の後にある。即鏡面とは關係のない獨立の對象と考へられる。然るに一方この映された對象は鏡面に屬する凡ゆる事象に對應すると考へて差支へない。即鏡自身それ自身白、黄、赤等の對象の意味として、特殊なる反射をなすと考へられる。從而鏡面の過程は作用素材に相當し、その後の過程は對象に相當する。兩者は正確に對應する。而も「作用素材」は常に real なる實在的な現象であるに對しその志向する「對象」は謂はゞ無記である。從而鏡の後の對象はそれが必然的に非現實的なる點に於て、志向的對象と異なるのである。勿論この場合、「對象の像」が原型に一致するからその對象は現實的であり、一致しないから非現實的である』と論ずるのではない。何となれば素材と對象との「對應」は規則正しく存在し、そこに一寸の例外もなく一致する。「像」と「原型」と云ふ意味の對應は意識の場合には

存しない。唯、一つの與へられた對象に關係するのであつて現實的といふ賓辭は多少正確なる研究或は徵イステイチエン馮イステイチエンに基いて初めてそれに歸せられるのである。

對象のこの無記的所與性即現實、非現實の彼岸にある現象性と云ふのは外的對象の「現れ方即射影」Abschattungといふ意味の現象性とは同意味ではない。「射影」に於ては現實、非現實、いづれの領域に在つても常に「射影」と「射影せられるもの」即射影の對象とが區別せらる。一の机の異つた多くの射影を寫眞に撮ることが出来る。純粹に現象學的意味の無記的所與對象はかゝる射影關係を持たない。それは現實性と絶對的に無關係に立つ領域である。

又外的對象の「射影」は作用の素材的内容と全然區別せられなければならない。「射影」はそれ自身現實性と否とに拘らず一外的對象である。それに對應して初めて體驗の側にそれと接合する作用素材が現れるのであると考へねばならない。

我々は知覺の對象を更に分析することによつてそれに對應する「感覺」の概念を明かに規定することが出来る。

凡ての對象は二種類の要素から成立つて居る。即一定の外的對象が與へられる種々なる仕方、即對象の形、大さ、量、時間單純或は複雑性等の性質を「形式的要素」といふ。

かく形式的に規定せられた對象は白や青であり得られるのであらふ。一般的に云へばそれは色、音、臭痛等を媒介する體驗の「發出帶」Ausgangs-Zone としての性質を持つのである。之を「質的要素」といふ。この兩要素は互に非獨立的である故に具體性に於ては不可分離に結付いてのみ有意味に考へられる。外的對象の凡ての具體的な性質に對應して體驗の側にも亦、その内容がなければならぬ。例へば同じ直径の赤球と青球を見た場合、或は又直径一寸の赤球と直径一尺の赤球を見た場合と明かに氣持 *Zumutsein* が異なる。之は寧ろ球を見て直接に生ずる意識狀態が先第一に異り、かくして初めて異つた感情狀態が現れるのであると考ふべきであらふ。故に外的對象に質的及形式的要素がある様に意識狀態にも亦この兩者に接合し、對應する體驗要素がなければならぬ。かゝる作用素材の形式的要素を形式(形態)體驗フォルム・イ・レクステンと云ふならば質的要素を「感覺」と云ふことが出来る。

「赤の感覺」とはそれ故に單なる赤、即圓い赤、四角い赤でなく、凡ての形式を度外視した單なる赤を知覺する體驗である。それは一定の個別的なる赤の要素を媒介し、その爲に特徴付けられた「氣持」を意味することにより性質的に特性付けられた知覺過程である。我々は尙「感覺素材」と「感覺作用」を區別することが出来る。前者は形式

的要素を完全に抽象した作用素材の質的要素である。後者は質的要素を單に抽象する全作用素材である。而も一般的なる作用形式はこの場合常に知覺である。

かくして感覺はブレンタノの主張した如く絶對的に作用でなければならぬ。白や青は一定の對象に屬するものと考へられない場合と雖も依然非獨立的外在的形象たることを免れ得ないであらふ。それは恰も線が一定の圖形に屬しなくても、依然空間的延長の形象であると同様である。

外的知覺に於て物的及心的が如何に關係するか。感覺とは何であるかの問題を究明せんとする最初の意圖は達せられた。故に知覺に於る作用形式、又作用素材の形式的體驗更にまた感覺自身が如何なる性質を持ち又如何なる合法性に従ふかの殘されたる問題は後の研究に譲る。

結 論

自然科学の研究によつて『個々の色、音、温、冷等は決して外界に現實性として存在しない』又對象の質的要素は作用素材の中に如何に明瞭に顯現しやうともそれは必然的に非現實的であると云ふ』の重要な事實が證明せられ得ても、それを以て直

ちにそれ等の要素をそれ自身感覺であると云ふのは正當でないであらふ。我々はブレンタノ立場へ還らなければならぬ。勿論彼に於ては感覺に於て作用と對象が、即心的と物的が如何に關係し、結付くか未だ明瞭でない様に思はれる。併し、フッサールの如く如何に精細に、如何に深くブレンタノを批判分析したにしても、彼が感覺作用と感性的内容を同一視し外的對象を感覺内容の一種の「解釋」によつて制約せられるものであると考へるのは正當でないであらふ。若しフッサールの曰く「具體的なる志向的體驗はそれ自身志向性を持たない所の感性的なるものから成立する」と云ふならばそれは所與性の領域を超えるであらふ。素材的なる感覺體驗は現象する物的要素(外在の性質)混同せられてはならない。我々は「作用素材」が如々に對象を媒介すると云つた。併し決してそれが對象の顯現法であるとは云はなかつた。「緑の感覺」は決して「物的なる緑」の「構造」それ自身ではない。物的なるものは決して「形式化」によつて非志向的なるものから志向的なるものになり得る所のものではない。それ自身形式なきもの、或は性質なきものを、形或は性質を附加することによつて形あるもの、性質あるものとはなり得ないであらふ。それは必ず最初より何等かの形、何等かの性質を持たなければならぬ。同様に體驗はその本質として最初より、志

向的でなければならぬ。即、外的對象に「接合すること、而もその對象の凡ての具體的なる特異性に作用のかゝる素材が對應することをその本質としなければならぬ。而も對應する兩特異性の間には如何なる性質的相等性も相似思もあつてはならない。兩者の關係はリンケの所謂「接合」Ge Koppelnである。『對象の性質の作用素材に於る「自己再現」』Sich-wiederfinden “であり、他方より云へば作用素材の對象に於る（自己顯現） “Sich-darstellen “[u. d. v.]”。

一般的に物的及心的現象の區別はブレンタノの嚴密なる區別に還らなければならぬ。而して心的現象即意識の志向性なる本質を可能ならしめるものは對象の獨立である。凡ての志向されたもの、特徴は體驗する主體からの獨立性である。リンケの所謂「層域獨立性」Schichten abhängigkeitの法則である。「非現實的」といふ賓辭は如何にしても物的なるものを心的なるものになし得ない。現實的、非現實的なる概念は物的、心的なる概念と交錯する。知覺せられた緑の面が實在界に存在しないこと即非現實的であることが證明せられても、綠色は決して心的現象或は體驗とはなり得ない。全く同様に回想、想像等の「内容」も單に非現實的であるが故を以て直ちに心的體驗とはなり得ない。童話傳説等の世界は假令現實世界の經驗的常識的合

法性に對して「無意味」であり得ても、決して矛盾ではあり得ない。龍宮は依然物的の建築物であり、童話の中に於ても「 $\times \times \parallel$ 」は必然的である。與へられたる外在は假令非現實的であつても、決して「自我保持的」としてはなく、「自我相異的」として示される限り、必然的に統一的なる「外在」である。感性的知覺の對象即感性的性質的なるものは現實、非現實に全然無記なる獨自の對象性領域を持つと考へられるであらふ。

然らばかゝる對象の領域が如何にして心理學の對象となり得るかはこの小論文によつて殘されたる問題である。(完)